

# 03

## プラチナプリント

- 遺失博物室 -

### Platinum Print

-Private Museum of Lost and Found Things-

映像メディア学科・助手

Department of Visual Media・Research Associate

小林 あす美 Asumi KOBAYASHI

## 概要

「遺失博物室」と題したこれらの作品群は、約10年間の日々の生活や旅路のなかで収集した遺失物をプラチナプリントで記録したものである。人の手から離れたものだけでなく、落ち葉や羽根など、元々あった場所から離れ、地上に取り残された“もの”を遺失物として扱った。道端や海辺で拾ったそれらは、長い月日の中で風化した独特の表情を持っており、原型を留めない程変型してしまっているものの中にはあった。いずれ時間が経てば、どこかに消えていくであろうそれらの“もの”を、耐久性に優れ、モノクロの色調豊かなプラチナプリントで記録・保存した。

## [制作]

撮影には、4×5 (inch) のフィルムを用いて、プラチナプリント用のコントラストの高いネガを作成した。支持体となる水彩紙は、最初の展示ではアルシュのプラティーンを用い、2度目の展示ではベルゲールを使用した。プラチナプリントの参考資料は未だ少なく、失敗の原因を突きとめるためには、それぞれの工程を見返す必要があり、安定した印画法を得るまでに多くの時間を費やした。その結果、最も重要な点は、湿度管理である事が分かった。プラチナプリントでは、水彩紙に感光液を塗って印画紙をつくるのだが、水彩紙は湿度に敏感に反応し、湿度の高い夏季と冬季では、仕上がりに大きな差が出てしまうのである。特に、湿度の低い冬季は感光液が浸透し難いため、暗室内の湿度を高くし一定に保つように注意する必要があった。支持体に塗る感光液の配合は、プラチナよりもパラジウムを若干多めに使用し、思い描いたセピア色調を再現することが出来た。

## 参考文献

細江賢治『古典印画に学ぶサイバール写真術-プラチナプリントを作る』写真工業, 64号, 2006年  
服部冬樹, 細江賢治『プリント制作の徹底ガイド』

## [展示]

展示では、プラチナプリントだけでなく収集した“もの”自体も並べて展示した。各遺失物には、拾った時の場所や状況を説明したテキストを並列して展示した。そうすることで、単純に並べられた遺失物が、どういう時間を経て、最終的にそこに辿り着いたのかを観る人が想像しやすいように心掛けた。伝えたいことは、プラチナプリントの美しさではなく、消えていく“もの”自体の持つ魅力であり、プラチナプリントやテキストと一緒に展示する事により、それらの関係性の中で見えてくる物語をつくることを目的とした。

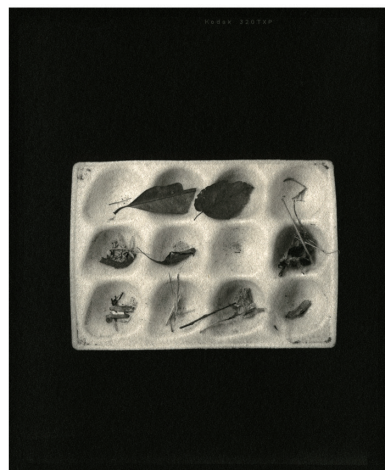
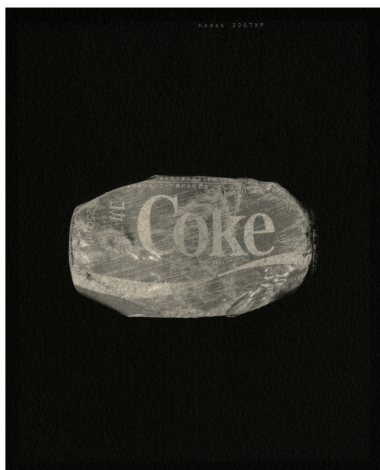
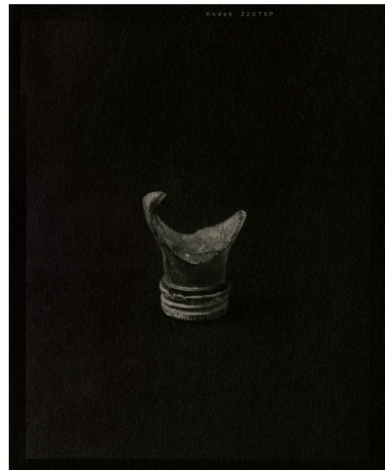
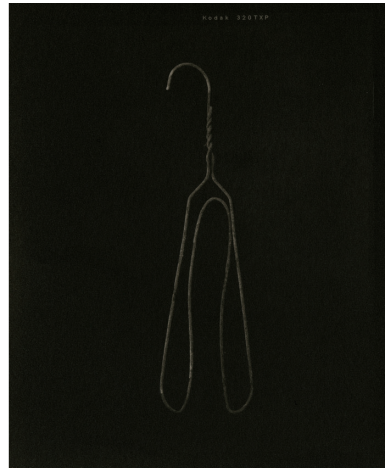
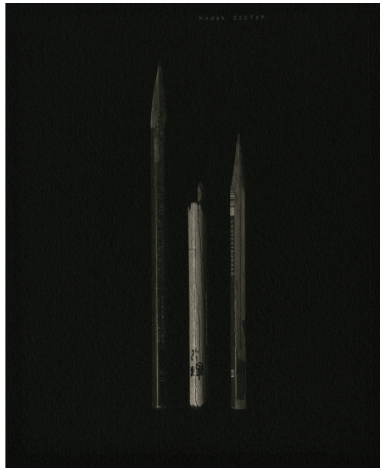


Photo1-9:「遺失博物室」, 2011年/Platinum Print, 4×5inch



Photo10-12: 展示記録, 2011年

遺失博物室 I

Private Museum of Lost and Found Things I

TAIGA カメダビル2階B号室

2011年3月17日(木)-3月27日(日)

(個展)



Photo13-15: 展示記録, 2011年

遺失博物室 II

Private Museum of Lost and Found Things II

名古屋市市政資料館一般展示室2 (重要文化財/旧地方裁判所庁舎)

2011年8月3日(水)-7日(日)

Outer's Void アウターズ・ボイド | 空所から、いま・この彼方へ (グループ展)